

『江戸随想集』と『孔雀樓筆記』

松 村 緑

書評といへば新刊書の紹介にきまつたもののやうであるが、この一文は新刊紹介兼旧刊紹介である。

筑摩書房刊現代版古典日本文学全集全三六巻は、当代作家学者諸家の口語訳本文に解説鑑賞の数篇を付載したシリーズであるが、去る二月配本の第三五巻『江戸随想集』を訳者の一人森銑三氏が御恵授下さった。収録せられた書目と訳者は左の通りである。

折たく柴の記

古川 哲史

駿台雑話・飛驒山・寓意草・折々草・孔雀樓筆記・北窓瑣談・

閑田耕筆・年々随筆・筆のすさび・退閑雜記・述斎偶筆

森 銑三

蘭学事始

杉浦 明平

うづら衣

岩田 九郎

新井白石の自伝『折たく柴の記』と杉田玄白の『蘭学事始』と

は私の年少の日に読んだことを今日でも感謝してゐる書物で、文学史に出て来ないこの種の著述、ノン・フィクションの書も是非読むべきものだと思はなかつた。横井也有の俳文集『うづら衣』口語訳で読まうとは思はなかつた。森銑三氏の文章の味はわかるものではない。わが日本文学科の学生諸嬢などはこれらの書物はぜひとも原文で読んでほしいと思ふ。

私が三日ばかりもこの書物を手から離さなかつたのは専ら森銑三氏御担当の随筆類の魅力による。近世に書かれたおびただしい数の随筆類は学者や教養人にとつて趣味ある読物であるのみならず、貴重な知識の宝庫でもあるが、専攻分野のますます細かく分れてきた現代では、何かの必要でもない限り読まれないのが常らしい。私自身何の目的もなしに読破した随筆といへば、『見聞談

「玉簪」と「耳袋」とその他何があつたか思ひ出せない位である。『玉かつま』は勿論、『亮々草紙』でも『甲子夜話』でも『柿園隨筆』でも必要あつて読んだに過ぎない。ここに紹介せられた十一篇の隨筆中、『駿合雜話』はまだ十八歳になつたばかりの頃、教科書として読まれた書物であり、『折々草』の抄出刊本である『漫遊記』もまだこの学校に入学しない前に読んだ記憶があるが、他のものは皆初対面である。頁数の都合でいづれも抄訳であるが、森氏の精選せられた書目であり、章段であるからそれぞれおもしろい読物であつた。とりわけ私の注目したのは『孔雀樓筆記』の一書で、これは早速原本を一読しようといふ氣持が動いたので、

春休みになつたら図書館通ひをしようと思つた。ところが森氏がその貴重な原刊本を御貸与下さつたので、居ながらにして熟読玩味することが出来たのである。この隨筆は明和五年（一七六八）の刊本があるのみで、明治以降の各種の叢書類にも収められず、まだ活字に組まれたことのない書物であるから、折角この良書に接することの出来たよろこびを私ひとりのものとするのはあまりにも惜しい。せめて内容の一端だけでも紹介してみようと思ふ。

『孔雀樓筆記』四卷、一冊に合綴せられた縦二七・五糎、横一八糎の紺表紙本で、奥付の刊記には「明和戊子之冬 日野屋源七・林伊兵衛・河南四郎右衛門發行」とある。各巻頭には、書名巻名

に次いで「越国文学播磨清絢撰」といふ署名があり、各巻末には「播磨堀栄吉・備前高潤・平安窪田恭・姪伊藤聖訓同校」とある。その連名中の堀栄吉（土善）と高潤（維亨）とが序文を、姪（この文字の正しい用法で、メイではなくヨヒ）の伊藤聖訓が跋文を書いて、この隨筆の刊行の事情を語つてゐる。

著者については森氏の解説にも「京都の儒者で、越前侯に仕へた清田儋叟……絢はその本名、播磨はその郷国である。」と見えるのみなので、今少し詳しく紹介の勞をとりたいと思ふ。

著者清田儋叟（一七一九—一七八五）、名は絢、字は君錦、別号を孔雀樓主人といふ。『孔雀樓筆記』卷二にその義祖父伊藤坦庵、義祖母内田氏、外祖母、父母、従兄などの性行を深い敬慕の情に満ちた筆で叙してゐる。父龍州は師家伊藤氏を嗣いだので、末子の絢に生家の清田姓を名のらせたのである。義祖父はもと医で、のち越前の儒官となつた当時の大儒の一人であり、父も「真正真風雅」「文章ノ雄大、議論ノ宏壮ナルヲハ、世人ノシレルトコロ」と著者の語るやうな立派な学者であつた。長兄の錦里、次兄の江村北海も著名の学者である。代々学者の家の子は自然に学者になつたものであらう。卷四に童子の頃の師、三輪安立の追想を語つていふ。このおつかない老師は古文真宝を一度に十枚づつ読ませ、三遍読んで記憶しない字が五つ六つもあるときびしく

注意してもう一遍読ませる。おそれて却つて読めない字が多くなると大目玉をむいて叱られ、帰れとどなられてこそそこそと逃げ帰ることが何度もあつた。ある時自分の本の表紙に「安立様ハ大目」「立安様ハ目大」と樂書をしたのを発見せられてしまった。以後は著者自身に語らせるはうがおもしろいので原文を引用しよう。

予ガ曰、実ニ誤リ入リソロ。ソレニツキテモ、私ハカタノワルキモノニ御坐ソロ。何某氏ハ十四歳ニテ、家父方ヘ読書ニ見ヘソロ。異哉^{ナル}子叔疑ノ一章ヲ、十七遍迄ヨミテ覺ヘラレザルホドノ人ナレドモ、家父伯氏（長兄の錦里のこと。著者より九歳年長。）トモニ、シカリ申サレズソロ。私ハ十歳ニテ、古文真宝十枚ヲ三四遍ヨミ、六七字覺エネバ、御シカリニアヒソロ。肩^{カタ}ノワルキ者ニテ御坐候。昨日フト仕候不調法、向後ハ仕ルマジトイフ。ソノ後程経^ヘテ、先生先人（亡父のこと）ニ語テ曰、令息ワヤクニハ候ヘドモ、イサ、カ見ル所コレアリ。御嫡子ノコトニテモナケレバ、学問ヲ好マレズバソノ通リタルベシ。コノマル、ナラバ、傍ヨリトヤカクイワズ、本人ノマ、ニ御仕立モナサルベキカトイワレシトカヤ。予成長シテ、諺ニイフ下手ノヨコズキトイフモノニナル。先生ノ見ル所アリトイワレシ一言ヲイタヅラニシテ、甚ハヅカシ。童子ノトキイ、タレドモ、

カタノワルキトイフ一言ハ、老テ益々ソノ効^{シルシ}アリ。

著者は天明五年三月二十三日、六十七歳で亡くなつたので、この隨筆刊行の年は五十歳である。皆川淇園と親交があつたらしく、序文の筆者は二人とも皆川の門下生で、師の紹介によつて著者に教を乞うた者である。堀栄吉の序文には著者を評して「多病多憂之人」と言つてゐる。彼らがこの書物を上梓しようとする著者は微笑して「老夫頃刻人耳。」といったとも書いてゐる。

この隨筆の内容は極めて多角的である。同時代人評もあれば、知友の逸事を語るものもあり、自伝の片鱗ともいふべき文章もある。中でも紀行文の断章のやうな「初鹿野」「輕井沢」「加納」「柏原」（以上卷二）の各章は情趣に富んだ文章である。またこの著者の文章には時々巧まざるユーモアがある。

○宿鳥^{ネトリ}ヲトルハ、罪深キコトノヤウニイヘドモ昼ノ鳥トテモ、死覚^{シニカクゴ}悟シテ居ニテハナシ。人ニテイハミ、白昼ニ名乗カケテウツモ、寝入タル人ヲ撃^{ウツ}モ、撃人ノ剛臆^{コウオク}ニハナルベシ、罪ノ輕重ニハナラズ。（以下略。卷三「宿鳥」）

著者はまた能樂に対して並々な鑑賞眼を持つてゐる。集中の能樂や謡曲に関する章段は、私にとつては非常に興味深く、且つ有益な文章であつたが、それよりも一層非凡な着眼点に驚かされたのは「源氏物語六章」であつた。近世の儒家も熊沢蕃山、安

藤為章（年山）など元禄享保頃までの学者には、源氏物語に関する著書を持つほど、日本の古典文学にも素養の深い人がゐるが、この著者の時代、明和安永天明といった十八世紀後半に入つては、一方には国学の興隆があり、儒家は完全に専門分野にたてこもるのが常であつた。この時代の儒家として源氏物語に対してこれだけユニークな批評を下し得た著者のよみの深さは敬服に値する。

○吾国モ唐土モ、上手ノ作りタル書ハ、何ヨリモマヅ心匠スグレタリ。寓言ノ書ハ、一人心匠都合セザレバ、コトバ巧ナルトモ、見ルニタラズ。……吾国ノ寓言ノ書、予が見ル所ニテハ、源氏物語ヲ第一トスベシ。所謂カノ心匠甚スグル。夕顔ノ巻ニ源氏中将タリ。コノ中将意義甚深シ。モロ／＼ノ官ノ中ニ、コノ時源氏中将ニテナケレバナラズ。初メ中将ニ任ゼラル、時、スデニ河原ノ院妖怪ノ一段ヲ伏ス。

○凡ソ古今妖怪ヲカキタルモ、イ、傳ルモ、十ガ九ハ丑満頃ヲ用ユ。カレコレノ中ニ雞ナク、鴉ナク。ソノ怪ニアヒシ人、後ニコレヲ聞人モ、トモニ曉ヲマチツクベシ。河原院ノ一段ハ、亥ノ刻ニ怪出ヅ。程ナクカノ怪フトキヘタリ。ソノアタリニ隠レラルヤ、スデニ立去シヤ、知ベカラズ。怪出テタ顔魔死ス。源氏ノ杖柱トタノミ玉フ惟光ハイマダ来ラズ。曠々タル古御所ニ、十六七ノ少年、トシノ相似タル一美人トカリ居シテ、ソノ

美人妖怪ノタメニトリ殺サレ、夜ハイマダ四ツ時スギニシテ、カノ妖怪イツ方ニカミ居ルヤラ知レズ。コノ時ニ当リ、イカガシテ夜ノアクルヲ待ツフセンヤ。ヨソロシキヲ至リト云ベシ。此等ハ心匠ノ妙ヲ得ト云ベシ。

○源内侍ノ一段、イフダチ過ル頃ト云ヲ以テコレヲカク。コノユフダチ心ヲ付テ見ベシ。タゞニ云タルモノニアラズ。

○浮舟ノ一段、浮舟仮寝シテ居ルトキ、侍女ドモ浮舟ノ姉ノコトヲ云。浮舟起カヘリテ云々。ソノ次侍女ドモ仕立物ヲシサシテ、寝ルニ至ルマデノ情状、画ニ写ガ如シ。身ヲナゲントスル水ノヲソロシキ川ニテ、近頃モ溺レ死タル人アルヲ、舟長ノ話ニ云アラハス。妙ト云ベシ。身ヲ投トスル川ノ音ヲキ、居タルト云ヲ以テ收結トナス。妙境トモ神境トモ云ベシ。

○薫中将ハ源氏ノ骨ヲ得、匂宮ハ源氏ノ肉ヲ得。コノ二人ヲ以テ、二人ニテ、一光源氏ヲ云テ未ダ足ズ。

○スベテ源氏ノ一書、ソノ妙處ハ人情ヲ曲盡スル所ニアリ。タマサカ風景ヲ装点スルノ語アルモ、妙ナラザルナシ。畢竟ヲホカラザルト、ナガ、ラザルトニアリ。吾国唐土ノ文トモニ、作者ノ才不才、コレニテモ見ベシ。篇々章々装点ヲ重疊スルノ書ハ、厭ベキモノゾ。

○或時富士谷仲達ト夜談シ、言源氏ニ及ブ。仲達イフ。吏部ヤ

ドヲリシテ史記ヲ読ム。タマサカノヤドヨリニ、無点ノ史記ヲ慰ニス。ソノ才力ヲソルベシト。又イフ。吏部史記ニ於テハ誰ヲ愛センヤ。戯ニ評シタマヘ。予ガ曰、吏部史記ニ於テハ、項王ヲ愛スベシ。仲達掌ヲウツテ大ニ笑テ曰、某モ左思ヘリ、某モ左思ヘリ。(以下割註)吏部ノ本名、避ル所アリテ書セズ。目次には「源氏物語六章」とあるが実は七章ある。(巻三)

終章に紫式部の本名を避けた理由は浅学の私にはわかりかねる。識者の教を仰ぎたい。吏部とは式部省の唐名で、式部卿官を吏部王と呼び、『吏部王記』といふ書名もあること故、式部のことを吏部と呼んだものである。仲達とは皆川淇園の弟、国語学史上不朽の名著『あゆひ抄』『かざし抄』の著者である富士谷成章の字である。

著者は唐土の史籍にその学問の主力を注いだ人であつた。広く深く史籍を読んだ結果、歴史上の人物に対して「成敗ヲ以テ論ヲ立ズ」独自の評価を下してゐる章段は精彩に富んでゐるが、最も私の心を動かしたのは「鬼哭」の一章である。この人間心理に関する洞察の深さ、觀察の鋭さは世事にうとい学者先生のよくするところではない。現実の人生体験のみではなく、むしろ多数の歴史上の人物とつきあつた末の立論のやうに思はれるが、高潤の序文にこの随筆の本質を紹介して「蓋清先生自書自娛者。不_ニ始_ニ為_ニ

之倫次。有_ニ談_レ理者。有_ニ論_レ事者。有_ニ記_レ事者。雅俗並舉。淺深各見。而至_ニ其精微之極者。使_ニ人毛髮悚植_一。」といつてゐる、その末項に該当するものに相違あるまい。

○人ノコトバニ從ヒ、人ノ説ヲ是トスレバ、人我ヲヨロコブ。人ノコトバニ逆ヒ、人ノ説ヲ非トスレバ、人我ヲイカル。コレ吾国モ唐土モ、古今一定ノ通理ゾ。然レドモソノ中ニ鬼哭ノ一事アリ。曰予ハ妻妾ヲタクハヘマジ。曰イマダ老衰ニ及バネドモ、家督ヲユヅリテ隱居スベシ。曰役義ヲ辭退スベシ。曰妻妾ヲ逐ベシト。コレヲノコヲ相談セラレタルトキ、ソノ言葉ニ逆ヒ、ソノ説ヲ非トスレバ、果シテカレガ怒リヲ発スベシ。当坐ニ怒リヲ発ストモ、ソノコトバニ逆ヒ、ソノ説ヲ非トスレバ、行スエ永ク我ヲ親愛ス。其コトバニ從ヒ、ソノ説ヲ是トスレバ、信友トモ知己トモ云。然レドモイツトモナシニ我ヲ疎遠ニス。是鬼哭ノ境ト云ベシ。予衰病シテ、死期既ニ至ル。世ニ云イニガケノ駄賃ナレバ、人ノ惡ヲ顧ズシテ、正直ニコレヲ論ズ。予死後ニ此書萬一世ニ残ラバ、ミルモノ將云ン。彼好デ慘刻ノ論ヲナス。ムベ厄窮シテ死セシコトヲト。世ニ云道具ヲトシニテ謗ルベシ。嗚呼予一生ノ精力、半ハ尙書論語通鑑史記ニアリ。コレ等ノコハ、毀譽トモニ心頭ニアツカルコナシ。(巻二)

著者は薄命非運の史上人物に対して同情の涙をそそぐ時、この

鬼哭の二字を用ゐてゐる。私はいまこの隨筆に接して、みづから「千薄運万薄運」（卷三「借書二奇」）といふ「多病多憂之人」に深い親近感を抱いた。明治以降翻刻せられたこともないこの書物の真価を認め、これを紹介し、さらにその原刊本を私にお貸し下さった森銑三氏に、心からお礼を申上げて、この新刊紹介兼旧刊紹介の稿を終へたいと思ふ。

（昭和三十六年三月五日）

（本学教授）